

私の履歴書

前橋 汀子

⑫

レニングラード音楽院にはロシアやウクライナ、エストニアなど、ソビエト連邦の各共和国から選抜された優秀な学生が集まっていた。寮で同室になった2歳年上のライヤはラトビアから来た赤毛のユダヤ人だった。口調はぶっきらぼうだが、心は優しい。たちまち親友になった。

母国の代表にじむ自負

誕生日会は大騒ぎ、交友深める

を洗い、また並んでお湯をためる。その繰り返しである。食料品を買うにも、先が見えないほどの長い行列に並ぶ。番台のおばさんに「チーズを100個」などと言って代金を払うと、チケットを発売してくれる。今度はその券を持って、各売り場の行列に並ばなくてはならないのだ。せっかく並んでも、途中で品物が売り切れてしまうこと

もある。「これはおれのだ」「あたしが先よ」といった怒鳴り合いは日常茶飯事。自分の主張を通さないと生きていけないのだが、それは私の一番苦手とするところだった。私は寮から音楽院まで混雑するバスで40分かけて通学していた。ソ連の人たちは体格が良いうえに、分厚い防寒着を着ているから、私は満員の

車内でいつも押しつぶされそうになっていた。「降ります」と大声を張り上げないと学校にも行けないのである。学生寮は6階建ての古いビルで、私たちの部屋のある3階は留学生フロアだった。東ドイツやポーランド、ルーマニア、中国、モンゴルといった東側諸国から選抜された学生が同じ階で暮らしていた。朝の紅茶を飲むにも、共用

の台所に2つしかないコンロまで沸かしにくい。各階に数十人の学生がいるからいつも奪い合いだ。中でも手ごわい好敵手が中国から来た8人の男子学生だった。彼らは当番制で料理を作ったり、ずっとコンロを占領して



寮の仲間と（左から4人目が筆者、右ヘイダ、ライヤ、潮田益子さん）

表面化した時代だ。政治的な力が働いたのかもしれない。音楽院の学生は1日に10時間以上練習した。自分の国や地域を代表してきているという強い自負を持ち、必死に勉強していた。しかし、学友の誕生

大きな鍋でギョーザをゆでたりしていた。私は何食わぬ顔で鍋をどかし、自分のやかんを火にかける。洗面所で支度をしてもどつてくると、やかんはどけてある。そんな小競り合いを繰り返した。とはいえ、仲が悪かったわけでもなく、彼らがごちそう

日だけは羽目を外す。そのメリハリは見事だった。なぜかアルコールはどこからともなく手に入り、ウオッカやワインの瓶を次々と空けて大騒ぎ。ポップスのレコードを蓄音機で流しながら、私も見よう見まねでツイストを踊ったのだった。（バイオリニスト）